

茶の湯 文化学会 会報

第114号 / 2022年9月26日
発行 茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
<https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/>

茶の湯文化学会の過去現在未来

——三十周年を迎えるにあたって——

矢野 環

今年度から会長を務めさせていただくことになりました。抱負等を申し上げるよりも、学会の現状に鑑み、実際の状況を学会員各位に良く知っていただくために、主に公開済の情報を取りまとめ、この様に見れば良いかの解説をしたいと思います。

本稿第一部は、来年三十周年を迎える学会の流れを解説する。第二部は、頁で平均した会誌・会報の費用、そして第三部には、茶道華道の経験者の変遷をみる。第四部は、今年度の大会について書き留める。

一、学会の流れ

茶の湯文化学会は、平成五年（一九九三）十月十六日に設立された。設立総会は「からすま京都ホテル 瑞雲の間」にて行われ、正式の総会へ向けての理事代行に、中村昌生（代行代表、後に会長）、林屋晴三、村井康彦、倉澤行洋（以上三名、後に副会長）、筒井紘一、熊倉功夫、赤沼多佳の各氏を選出した。顧問的役割は、芳賀幸四郎、林屋辰三郎、永島福太郎等が務めた（*1）。平成五年度総会大会は、平成六年二月十二日に行われた。その後の会長は、平成十三年に倉澤行洋、十九年に谷晃、二十五年に熊倉功夫、令和元年（二〇一九）

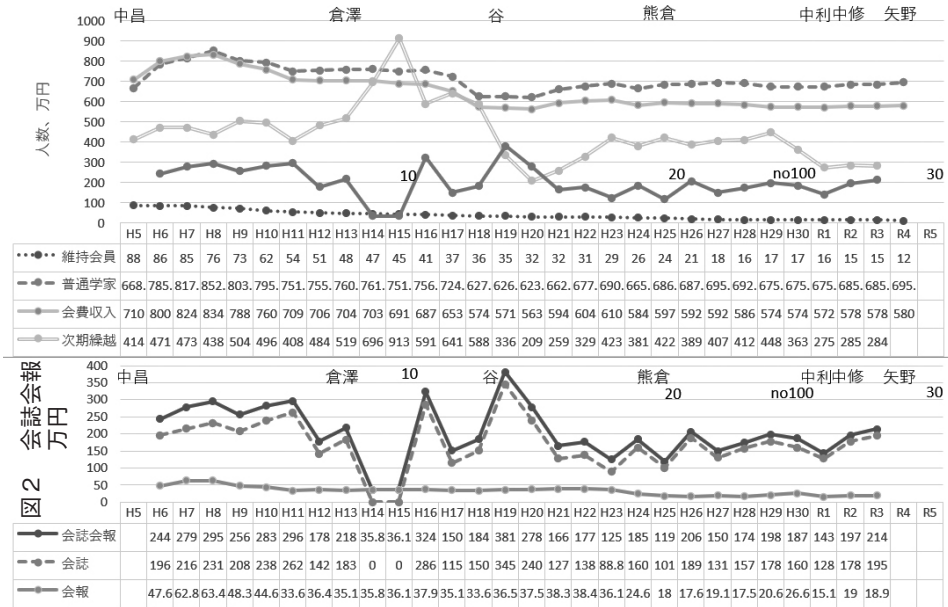
に中村利則、二年に中村修也が選出された（*2）。会誌は「ナンバーワン・デザイン・オフィス（佐村憲一）」に依頼し、デザイン料は三十六万六千円であった。会報のデザインは当時の谷理事などが設計され、平成三十年の一〇〇号まで使われた。

会員数は日々流動するものであるが、予算案の会費収入に付記されたものを用いることとする。平成六年で、維持会員（一口二万円）の各々が、八十六口と七百八十五人であった。維持会員数を会費比率で普通会員に換算して加えると、千人ということになる（*2）

3)。維持会員は平成五年の八十八口以降ほぼ単調減少を続け、令和四年では十二口となっている。普通会員は平成八年の八百五十二人から令和四年の六百九十五・五人に至る（学生・家族会員数の半分を加算して、普通学家と表記）。維持会員の換算を加えて七百二十五・五人となる。これらの数値をより解りやすいようにグラフとして次の頁に提示する（上部が図1下部が図2。歴代会長名の略記、周年を付記した）。データそのものも付記する。図1では、会員数とともに、三つの金額（万円）も示す。それらは会費収入、次期繰越金、会誌会報支払である。会費収入は当該年度の支払と、既年度分とを合算した、決算書での数値である。会誌会報については、図2にその詳細を示した。即ち、会誌、会報の個々の支払金額と和である。平成十四、十五年は、会誌が発行されていないため、次期繰越金は九百十三万円に至るが、

その後定常発行に三冊を加え発行し（平成十六、十九、二十）、繰越金は二百九万円まで低下した。後に繰越金は四百万円程度まで回復し七年間ほど保ったが、令和になりまた二百万円台に陥っている。より詳しく見れば、様々な問題がわかる。図1で年度を追うと普通学家と会費収入の乖離が目立つようになってくる。これは維持会員の減少が図に現れたものである。平成十三から十五年にかけて次期繰越金は二百万円ずつ増加したが、その後会誌を三冊追加発行した平成二十年までに七百万円減少した。単純計算より百万円が減っているが、他の行事のこともある。平成での四百万円程度の次期繰越金が令和になって二百八十万円程度に落ち込んだ一つの原因は、平成三十年の会報一〇〇号を迎えるにあたり（グラフ内「no100」として指示）、「会報、封筒三種、ロゴ」の新規デザイン料金が六十四万八千円になったこと

図1 普通会員＋[学生家庭] / 2、会費収入、次期繰越、会誌会報、維持会員数（会長名、中：中村）



も挙げられる。理事会提案では名刺等へのロゴ適用も言われていたが、使用例は不詳である。同年に「会誌 色指定印刷管理料」として五万四千円が支出されている(同趣旨の支出は平成二十六年の三万円がある)。なお、会報の用紙が超厚手に指定されたが、それは扱いにくく、かつ折り目が目立ちかえって読み難くなるため、早々に元の用紙(それでも厚手)に戻された。来年度には会誌が四〇号となるが、たとえ学会三十周年であっても、会誌・会報ともに特にデザイン変更の必要もなからう。図2から、会誌と会報の相対的な支出関係がわかる。

その他、重要な出来事を纏めておこう。会誌論説の査読は平成九年からである。平成十一年には中村昌生会長から、会員数が漸減していることについて、「会員は千人必要である」と危機感の表明が行われた。平成十三年には、『茶道学大系』(淡交社)が完結し、

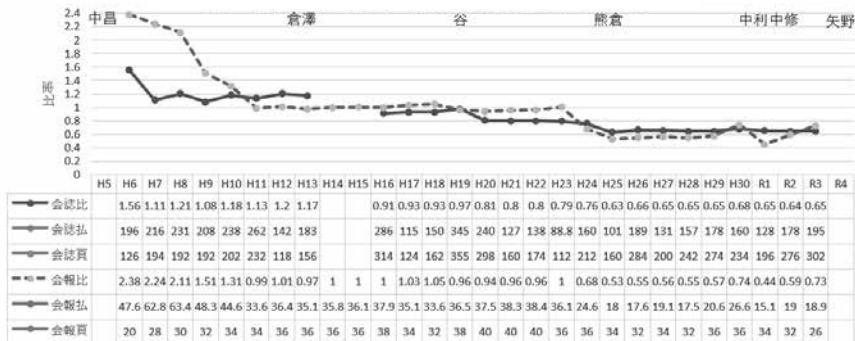
その後の研究の基礎となつていく。特に第十巻 筒井紘一編『茶の古典』には、紹鷗時代の名物記など現在は基準となつている史料が提供された。平成二十年には、谷晃会長も会員減少に危機感を感じ、会報五十八号には会員募集に関する表明がある。その後図1のように回復した。平成二十六年は茶の湯文化学会二十周年にあたり『日本茶の湯全史』(思文閣)三冊を発刊した。平成三十年十一月に中村昌生初代会長が歿したが、監修された『茶室露地大事典』(淡交社)はその三月に発行された。令和三年五月には、『萬象録』(思文閣)が完結した。

二、会誌・会報の頁平均費用
 会誌・会報関係費用の性格を見るために、それらの一頁あたりの費用を算出する。会誌については年度での一冊又は二冊の頁の和を、会報については年四回の頁の和を取る。そして、一頁あたりの

費用を算出する。ここでは印刷部数による均一化は行わない。学会発足の頃は、様々な大学や機関に会誌を送付していたが、やがて中止したらしい。但し、国会図書館に納入していない冊があり、近年に送付したため、事務にも全く無い号冊が発生した(この問題は処理済である)。

図3に頁平均費用を提示する。これで分かるように、初期の数年を除けば、区間毎にある程度の定常性が見て取れる。初期は印刷会社としても手探りであったためか高コストになっている。平成二十六年度からは、会誌は年度に二冊発行となった。百頁程度や未満の冊もあるが、年度での頁数は概ね二百〜三百程度であり、それ以前よりも多めの事が多い。さらに図3から見れば、二冊化によりコストが増加したこともなく、成功したといえるであろう。会報は事務局により編集され会報委員会により確定される。

図3 会誌支払(万円)/総頁数、会報支払/年度頁数



既に紙などの材料費は値上がり傾向にある。会誌・会報の部数をこれ以上減らすことはできないので、原コストを削減するほかない。

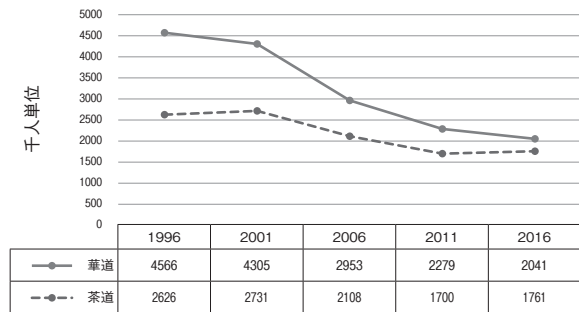
三、茶道華道経験者(行動者)の減少

会報一三三号で、生活文化に関する平成二十九年(二〇一七)の五千三百十五人に対する調査データを提示した。茶道、華道、香道、煎茶道の経験者はそれぞれ、一千百三十二、一千十六、五十二、八十九であった。サンプルサイズの大い(約十八万人)五年毎の総務省の調査も既に文化庁の華道・茶道の令和2年生活文化調査研究報告書に引用されている。母集団は推定全人口(約一億二千万人)の内、十歳以上と十五歳以上の場合が混じっているようだが、同じ形態とするために文化庁の数値を引用し、また考慮されていなかった誤差をバーで表示して、図4とする。調査データから全人口で

の経験者を推定するには、比率 p に対して誤差 $\pm 1.96 \cdot \sqrt{p(1-p)/n}$ コーサンプルサイズを考慮せねばならない。コ十八万であれば、この誤差は十分小さく、通常は考慮する必要はない。しかし、二〇一六年のように接近してくると、考慮に値する。特にこの秋に公表される二〇二二年の結果で、茶道 \vee 華道となるかもしれないが、誤差を考慮しないと確定的な主張はしがたい。

ここで、一九九六年の茶道行動者数を基準として二〇一六年を見れば、67.1% になっている。図1を参照すれば、普通会员で82.3%、会費収入では70.3%である。つまりは、減少の傾向はやむを得ない程度である。さらに、現在大学で茶の湯関連の研究を明記するところはない。特に博士号を出せる大学院は二〇一九年度で無くなったのではないかと思われる。研究者の継承はより重要な問題である。

図4 華道・茶道 行動者数推移



四、令和四年度大会

令和四年度総会大会は、六月四日(土)、同志社大学今出川キャンパス良心館RYOJで参加者二百六名で行われた。この会場確保は、宮武慶之幹事と、同志社大学社会学部佐伯順子教授のご協力による。映像配信は行わなかったが、設備の調査、録画実験なども行っ

た。出版社は、思文閣、淡交社、宮帯出版のご協力を得、配布資料に各社四点の出版物を含めた。翌日は見学会が六群(各群十名)に分けて行われ、野村美術館で茶席と展示鑑賞に加え、谷晃館長による特別講義を受けた。

講演・総会などは山田哲也副会長の総合同会の元で行われた。研究発表1は石橋健太郎広島県立歴史博物館(ふくやま草戸千軒ミュージアム)学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長により、「闘茶の種目とその内容について」文献資料と出土史料から探る」が行われた(司会矢野)。闘茶が濃茶に、雲脚茶(下級茶ではない説を支持)が薄茶になったという仮説が提示された。それと共に『遊学往来』は潤色が疑われるとされた。なお当該博物館は平成七年秋に企画展「茶・花・香―中世にうまれた生活文化―」を行うなど造詣が深い。そして草戸千軒等から実際に発掘された札(闘茶か聞香

用かの判断は難しいとされた)を用いる議論であった。

研究発表2は、山館優子氏(東
北大学大学院文学研究科)によ
り「利休によりクローズアップさ
れた村田珠光」が行われた(司会
八尾理事)。先行研究の整理とい
える。発表順序を、先行研究、史
料、自身の考え、という順序です
べきという指摘もあった。とこ
ろで、永島福太郎氏は常々「珠光
に村田を付けてはならない」と注
意しておられた(今回も質疑にお
いて山田副会長から詳細な説明が
あった)。平成十四年、総会と大
会が同時開催となった時の氏の講
演では、それまで「じゅこう」と
した発音を「しゅこう」と変更さ
れたことが思い起こされる。晩年
まで様々な研究者の説に目を配っ
ておられ、正しいと思つたものは
取り入れておられた。さらに講
演後の発言だが、『茶道古典全集』
等での間違い等は修正してほしい
と希望されていた。永島氏は講演

の6年後(平成二十)に歿し、そ
の翌年に『秀吉の智略「北野大茶
湯」大検証』が出版され、氏の望
んでおられた修正の一つが実現さ
れた。

午後のシンポジウム「わび茶の
生成 珠光から利休へ―珠光生誕
六〇〇年、利休生誕五〇〇年―」
は大橋良介氏(日独文化研究所)
の基調講演の元で、田中秀隆(三
徳庵)、美濃部仁(明治大学) 両
氏を加えて議論が尽くされた。淡
交社の茶書古典集成『南方録と立
花実山茶書』を良く参照されてい
ることが分かった。これについて
は別途田中氏によって、概要なら
びに論説が用意されて会誌に公表
される。

今後の課題は多いが、順次解決
し、三十周年にふさわしい学会と
なることを願っている。

註

一 林屋は茶の湯の学会は作らず

に、藝能史研究会の部門として活
動すればよいとしたが、熊倉元会
長が説得された。熊倉・筒井は茶
書購読の木芽文庫の主催者であ
り、一九六九年から発行されてい
た会誌『茶湯』は当時思文閣が担
当し、二十二号を平成元年に、最
終二十三号は平成六年発行であつ
た。また宝塚大学と2つのサテラ
イトにおいて多くの研究者を輩出
された倉澤元会長も学会設立を考
えたところデメリットを忠告する
方もあったが、実行に向かった。

加えて林屋晴三等東洋陶磁研究者
も合流した。更に当時、茶の湯専
門の会誌が必要とされていた。

二 中村利則は病気のため会長辞
退となり、中村修也が会長代行と
なった。修也氏は会長二年目の大
会終了後に会長辞退・会員退会を
申し出られた。このため令和に
入ってから状況が乱れている。

三 会費比率は 20.8 (千円単位)
であるため、 $86 \times 20.8 = 43 \times 5 =$
 215 であり、これを 785 に加える。



見学会(野村美術館・谷館長による特別講義)



シンポジウム

令和四年度総会

総会は令和四年六月四日（土）十二時三十分から、大会会場である同志社大学今出川キャンパス良心館で行われた。最初に第一議案「議長選出」において、山田哲也副会長が満場一致で選出され、その後は山田哲也議長が進行された。つづく第二議案「令和三年度事業報告ならびに決算の件」、および第三議案「令和四年度事業計画ならびに予算の件」は、それぞれ報告、提案があり、第四議案「役員選出」は、矢野環副会長が会長に選出され、いずれも異議なく全会一致で承認された。

例会

東京例会

（令和三年十月二十三日）

「益田克徳の茶とその周辺

その二 — 克徳の塩原とは何処か —

神保乃倫子・八木京子

益田克徳は明治の茶の湯を牽引し築庭にも才能を発揮した人物で、克徳を高く評価した高橋箒庵は『昭和茶道記（二）』で塩原の「名所」「箒川」「合流する処」を挙げて「克徳の築庭は塩原の縮写図であつた」と記述し、以後、箒庵の言う「箒川と合流する処」が「克徳の塩原」、「克徳の築庭の縮写図」として定説化している。

今回私共は「克徳の築庭」の原点を求めて現地を訪れ、その具体的な場所を確認した。しかし、箒庵が指す場所に克徳の足跡は認められなかった。

一方『益田克徳翁伝』には、益田多喜子の話で「克徳は小太郎ヶ淵に行っていた」との記述があり、「小太郎ヶ淵」には鈍翁が昭和二年に「留魂地」碑を建立し碑文を刻んでいる。以下、私共が碑文から起こした要約である。

①克徳は明治十九年以降、度々訪れる程「小太郎ヶ淵」の山水を愛した。②克徳は「小太郎ヶ淵」を築庭の摸本とした。③克徳は「小太郎ヶ淵」に土地を購入し、亡き後は弟の英作が継いだ。④「小太郎ヶ淵」は鈍翁と兄弟の大切な場所だ。⑤鈍翁はそれを後世に伝える為に碑を建立した。

以上のように石碑には「克徳は小太郎ヶ淵を築庭の摸本とした。」と刻まれており、「克徳の築庭」の原点は「小太郎ヶ淵」であることは明確である。又、私共が入手した約百年前の絵葉書に「克徳の茅葺小屋」が認められ、「小太郎ヶ淵」が克徳の居た場所であつたとの確証を得た。

箒庵が克徳の築庭の摸本が「小太郎ヶ淵」と明確に記さなかつた故か、後年鈍翁は箒庵に茶会記の中で「留魂地」碑の碑文を紹介させて克徳の築庭の原点を後世に遺すという方法を取つたのではないかと私共は考える。

「樂長入の創意について」

今井 敦

長入は樂家第七代。初代長次郎、三代道入、五代宗入、九代了入らと比べると、その評価は高いとはいえない。長入の活躍期は、政治史ではいわゆる田沼時代、文化史では宝暦・天明文化期に相当する。この時期は、茶の湯が町人層にまで爆発的に広まり、家元制度が確立した。長入の茶碗もまた、茶の湯の形式化と結びつけられて語られることが多い。

京焼では尾形乾山が江戸入谷に下向してから、奥田穎川が磁器の焼成に成功するまでの、半世紀余りの名工不在の空白期にあたる。しかし、この時代はけっして芸術・文化の低迷期ではない。とくに絵画の分野では、円山応挙、伊藤若冲、曾我蕭白、池大雅、与謝蕪村といった名が綺羅星の如く並ぶ。文学の世界では上田秋成が現れ、また文人趣味とともに煎茶が流行した。

東京国立博物館に長次郎七種の録開の長入による写しがある。透明感と光沢のある黒釉が施され、口縁は波打ち、見込みは篋で茶筥摺りに段を付け、そのまま螺旋状に茶溜まりに続いている。そこには古楽をそのままにコピーする意図は認められない。すなわち、江戸時代中期を生きた長入の長次郎理解なのである。

長入が生きた時代は、若冲、蕭白らによって「奇想の黄金時代」が現出した。この時代の茶の湯もまた、そうした時代の空気と無関係ではなかっただろう。長入もまた、「奇」を求め、異端をむしろよしとする、時代の感性に共感する部分があったとみることができるところではないだろうか。

(令和四年三月十三日)

「近代数寄者の表装―『大正茶道記』にみる『佐竹本三十六歌仙絵』の表装」
濱村繭衣子

益田鈍翁をはじめとする近代数寄者たちの伝統に捉われない革新性は、茶の湯の歴史、また美術史の中でも特筆すべき活動と位置付けられている。彼らの嗜好や活躍した時代の特性は、その蒐集品の表装にも端的に表れていると考えられる。中でも「佐竹本三十六歌仙絵」各断簡は、手がけた人物やその時期が判明する点、表装を巡る状況を伝える資料が残る点などから、日本の表装史を考えるにあたって極めて重要な対象と考える。

発表者はすでに『茶の湯化学』三三号において佐竹本断簡の表装について報告を行っており、ここでは、三七の断簡のうち、三幅を取り上げて考察を行った。今回はさらに対象を拡げ、全体に目配り

しつつ、特に十五幅について、資料と作品の両面から分析を行った。

発表では、『大正茶道記』に記載された佐竹本表装の記録を検討、現状との比較を通じて、変更の状況を確認、その上で佐竹本にみる表装の特質について考察した。当初の状態を留めていると考えられる例においては、本紙の深い理解の上でなされた表装がみられる点に言及、さらに、作品の比較、鈍翁が残した書簡の分析を通じて、鈍翁が複数の佐竹本の表装に関与した可能性について検討し、近代数寄者たちの交流の中で醸成された佐竹本表装の性格についても言及した。変更されていると考えられる例については、その状況を検討し、変更の意図について考察を加えた。最後に佐竹本の表装が特殊な状況下でなされたものであること、それが表装の性格、その後の改変についても影響を与えたであろう点を指摘し、近代数

寄者による表装の特質の一端についての見解を提示した。

「渡辺又日庵とその一族の茶の湯」

水野莊平

渡辺又日庵規綱は尾張藩の万石家老・渡辺半蔵家の十代で、茶の湯に深く傾倒した人物である。渡辺家ではこの又日庵を中心として盛んに茶の湯がおこなわれていたことが推察されるものの、その具体的な内容については不明であった。本発表では約十八会分の渡辺家関連の茶会記が収録されている『渡辺家茶会記』を中心にして渡辺家での茶の湯の具体像について考察した。

又日庵の養父・渡辺綱光については、茶陶の制作を行っていたことが確認され、裏千家の茶の湯を嗜んでいたことが推測された。又日庵の嫡子・寧綱については、裏千家の茶を修め、たびたび茶会を開催していたことが確認され

た。同じく子の箕田宗範について

は江戸で玄々斎の代理的な立場にあり、非常な茶の湯の巧者であったことが推察された。また、又日庵の子と考えられる無有斎又玄

(浄願寺又玄) という人物がおり、又日庵所蔵と思われる道具を使用して茶会を催していたことが確認された。ほか、分家筋の渡辺新左衛門(在綱)が又日庵の茶会の主客を務めている事例が見られ、同じく分家筋の渡辺半九郎壽綱が徳川齊莊の指示によって裏千家流の茶を嗜んでいたことが推察され、その子の猛(対馬守)も流儀は不明ながら茶の湯の巧者であったことが明らかとなった。

渡辺家では又日庵だけではなくその養父の綱光や息子たち、さらに分家筋の渡辺半九郎父子や渡辺在綱も茶を嗜み、時には茶の湯を媒体として渡辺一族間で交友していた姿が明らかとなった。

近畿例会

(令和四年四月三十日)

「茶の湯における「銘」の研究」『松屋会記』を中心に——板垣華蓮

茶の湯の世界で用いられる「銘」は、特定の茶道具につけられる愛称的呼称である。

茶の湯において言葉をもつ「銘」は、茶会の趣向をあらわす装置として言葉以上の役割を果たす。現代の茶会は趣向としての季節が重要視され、「銘」はその季節を示唆する。しかし茶の湯初期の茶会では、名物道具を拝見することに重きが置かれ、「銘」や趣向が重要ではなかったことが定説とされている。

茶会における趣向としての季節感の誕生について、先行研究では小堀遠州(天正七「一五七九」年—正保四「一六四七」年)により、俳諧の影響があったとされている。そこで本発表では、遠州よりも先立ち、また遠州の時代とも

重なる初期の茶会を記した『松屋会記』(天文二「一五三三」年—

慶安三「一六五〇」年)、延べ一七七年間にわたる茶会記を資料として扱う。『松屋会記』から「銘」を持つ茶道具を抽出し、歌学書などから「銘」の季節を特定する。

「久政茶会記」(全三九九会)には七十六、「久好茶会記」(全一八五会)には二十二、「久重茶会記」(全二六八会)には四十六の「銘」を持つ道具の確認ができた。その中でも「久政茶会記」に登場する「九重」茶壺、「宇治橋」茶壺、「鶴ノハシ」花入は、茶会の開かれた季節と一致する「銘」をもつ道具であった。遠州の時代と重なる「久重茶会記」には遠州の茶会も確認できるものの、「銘」が機能した茶会は確認できなかった。

今後『松屋会記』以外の茶会記からも「銘」を調査する必要がある。またその「銘」の認定や趣向の検討など今後の課題とする。

金沢例会

(令和四年五月二十九日)

「利休の数寄雑談 神屋宗湛に語った利休の心」

竹内順一

『宗湛日記』の天正十五年正月十二日条は、上松浦唐津村から上洛した神屋宗湛が初めて利休の茶の湯(於・大坂屋敷)に参会した記事である(『茶道古典全集』第六卷)。

宗湛は大和郡山の羽柴秀長茶会から堺経由で急遽駆けつけたため、「大坂二八ツ時分(午前一時頃)ニ着、利休路(露)地ノ口ニ侍」という結果になったことは有名なエピソードである。使われた当日の利休道具は、①「五徳」、②「釜 アラレ、ウバノ口(霰姥口)、鬼面」、③「高麗筒(花入)」、④「橋立ノ大壺」、⑤「土水指、唐」、⑥「尻フクラ(膨)」の茶入、⑦「井戸茶碗」、⑧「土(の)水覆」、⑨「引切(青竹蓋置)、である。このうち、『山上宗二記』には「引

拙祖母口ノ釜 関白様ニ在」とある②徳川美術館「姥口叢釜」と、③不審菴「南蛮筒花入」をPPT画像で紹介した。また、④「橋立ノ大壺」は「渡し壺」ではないか、また、⑥「尻彫茶入」は、『天王寺屋会記』宗及他会記の天正七年（一五七九）正月二十六日条から『松屋会記』久重茶会記の慶長十三年（一六〇八）二月二十五日条まで、計五回茶会記に登場するも、『茶話指月集』にある「…今日庵主（千宗旦）、古宗佐（四世江岑宗左）へ物がたりに、宗易ハ尻彫の茶入を嗜で、二つまで所持す」や「一つハ（細川）三斎へまいらせ、一つハ予（千宗旦）が家（千家）に伝えたる…」の記事に注目し、二口の尻彫茶入のうち現存尻彫分は永青文庫所蔵分に該当することを確認・紹介した。

方を確認した。そもそも「名物裂の尊重」は、利休時代にはなかったことをあらためて辿った。また、二項目目の、個別の唐物茶入専用の「付き茶杓」という古い使用形態から、「小壺の口に」入（いり）サヘセバ也」という変革があったことを紹介した。さらに、五項目目の小茄子「三ツ（ノ）内」を、「つくも茄子」・「珠光の小茄子」・「紹鷗茄子（松本茄子）」と限定し、『山上宗二記』と茶会記の使用記事と比較検討した。八項目目の「内赤ノ盆」に関して、「赤ハ雑ナルココロ、黒ハ古キココロ也」の真意を絵巻に表れた画像と現存例とを中心に比較検討した。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合がありますので、ホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメー

ル等でのお知らせはしております。せん。

東京例会

令和四年十一月二十七日（日）

午後二時～

（会場：未定（後日ホームページにてお知らせします。））

（会場とZoomによるハイブリッド開催）

「益田克徳の茶とその周辺 その四」

八木京子・神保乃倫子

「続き薄茶について（仮）」

岡本浩一

令和五年二月十一日（土）

午後二時～

（Zoom開催）

「松平不昧の新しい道具づくりについてー小林如泥の指物作品調査からー」

倉澤佑佳

「高橋箒庵ー『大正名器鑑』を中心にー」

齋藤康彦

静岡例会

令和四年十月二十日（木）～二十

三日（日）

（会場：静岡コンベンションセンター「グラランシップ」）

世界お茶まつり協賛イベント「未定」

東海例会

令和四年十一月二十六日（土）

（会場：昭和美術館）

午後二時～三時半

（開場午後一時半～）

「指物と吉田家」

稲垣信齋

近畿例会

令和四年十月十五日（土）

午後二時～

（会場：同志社大学 今出川キャンパス 良心館 RY106）

「茶室建築をめぐる日本人の用材

観 木材解剖学×茶室×精神」

田鶴寿弥子

令和四年十一月十九日(土)

午後二時～

(会場)同志社大学 新町キャンパス 尋真館 Z20)

「堺市博物館 特別展「堺と武将

三好一族の足跡」関連発表」

宇野千代子

「長谷寺の文化―茶道、連歌を中心として―」

久野由香子

令和五年三月四日(土)

午後二時～

(会場)同志社大学 今出川キャンパス 良心館 RY105)

発表者未定

金沢例会

令和四年十月三十日(日)

午後一時～

(会場)金沢 IT ビジネスプラザ 武蔵)

「前田家と」鳴海織部窯耳付き茶

入 銘 餓鬼腹」

木塚久仁子

令和四年十一月六日

移動例会 高山方面

「金森宗和について」

谷 晃

令和五年三月(日未定)

午後一時～

(会場)未定)

「茶の湯と社会的意義/地域への影響(仮)」

伊東 梢

高知例会

* 参会希望者は予め連絡をして下さい。

令和四年十二月十一日(日)

午前十時～正午

(会場)高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

茶の湯関係文献を読み所感の発表

岡倉天心『茶の本』第7章輪読

(各自お持ちの本をご持参ください)

茶 事 正午～午後四時

席主 四名

会費 五千円

令和五年二月十二日(日)

午前十時～正午

(会場)高知県立文学館 慶雲庵 茶室)

高知支部二〇二三年度事業計画

新刊紹介

『茶の湯の茶碗』第四巻「和物茶

碗Ⅱ」

梶山博史責任編集 淡交社 定価

六、九三〇円(税込)

展覧会のご案内

令和四年十月八日(土)～十二月

四日(日)

京都国立博物館 特別展「京(みやこ)に生きる文化 茶の湯」

* 記念講演会が予定されています。

※学会からの郵便物は、会誌・会

報・大会総会のご案内・年会費

の払込用紙など、複数同封する

ことがありますので、必ず開封

して中をご確認ください。

※年会費未納の方は、至急払込み

くださいますようよろしくお願

いいたします。

